

幼稚園の中での 子どもの評価と教育



宮崎 洋子

教育と評価、もつとつきつめれば、人間が生まれてから死ぬまで、人間社会にあつては評価がつきものである。

小学校に入れば評価は絶対的なものとして取り上げられるようになり、親も子も、絶えず評価の前にしぼりつけられてゆく(多くは、教科的な評価であるが)。

十一月の終り頃、入学の為の身体検査と合わせて、簡単な知能テストが各学校で行なわれ、私の組の子ども達(一年保育五才児)も希望をもって、それぞれの学校に出かけて行つたようだった。

「先生、僕ね、きのう学校で試験うけたよ」

「うん、全部わかつたら十三点よ、あんなのかーんたんよ。ねえ、すぐ わかつた」

「僕もよ。すらすらっと かいてやつた」

「あたしも。やすかつたねえ(易しかった)」

得意になって話している子ども達の間に、大きな目をくるくるさせながら、やや唇を開いて、両手をポケットに入れ、立っているK男に気づいて、ちよつとどきんとした。

この子も学校へ行くのだ。

子ども達の貴重な体談はなおも続き、

「K男ちゃん、きのう 二回テスト受けたネ」

A男が言った。

「あら、そう、Kちゃん ひとりで二回もテストを受けられたの、えらいわネ」と言つて私は、その話を打ち切つてしまった。

ああやっぱり、それにしても、友だちの大勢見ている中で、二回もテストの部屋を換えさせなくともよいのに……。

学校教育においては、評価は批判や優劣の為のものとなり易

いのではないだろうか。一個人を考えた時の評価ではなく、集団の中の個人として教科学習の評価が多くされる。その為の標準がきめられ、いろいろな優劣の段階が作られて、幼なくして、既に、その子どもの社会的な価値が定められたような錯覚に陥ってしまう。

幼稚園は個人的人格形成の場であり、生活態度の訓練の場でもある。

子ども達が社会の一員として立派に一人立ちできるように基礎をしつける為には、訓練も必要であり、訓練する為には、評価も必要であると思う。

その子どもの将来を考えて、有益ならば、大勢の中での批判も大切であり、一個人の成長を考えて、一個人の立場を尊重した評価を行いたいと思う。

先に話題にあげられたK男は、知的にやや劣っていると思われる、組にスキップのできない子が二人あり、その中の一人である。非常に内気で、思うことも言えない、左利きである、幼児語がひどく、身体も小さい。

特に目立って優れた事柄(優れたという規準がどこにあるか問題であるが)の場合は、大勢の前で評価されても問題はないが、特に劣った事柄(これも劣るといふ段階のつけ方が問題である)の場合は、考えなければならぬと思う。このような場

合の評価は、批判になりやすいから……。

K男は入園の時の身体検査で心臓弁膜症の疑いをかけられ、入園を控えてはとまで言われた。結局、心電図にも異常は認められなかったが入園後の検査の時、また同じことを言われた。それ程に気が小さく、緊張していた。母親はK男の態度にひどく劣等感を抱いていた。K男もその影響をうけていたようだ。内気であるとか生まれつき弱いなどということは、人間を評価する場合に、余り問題にならないようである。

私はそのことをK男に結びつけた。

母親も、人より身体つきが弱く、内気だから劣っているように見えるのであって、それさえ、なおれば、積極的な行動もできるよくなると思いたいらしく、組の子ども達にも、そのように思い込ませていった。

皆の前で、できないけれどもスキップをしたり、当番も、他の人に手伝わってもらいながら、やることができるようになった。

運動会も楽しそうに加わり、他の子ども達と競技に参加しても、ちっとも見劣りしなかった。時々、幼稚園に行きたがらない日もあるが、翌日はまた、元気にやってきた。

そのうちに、私もK男の存在が気にならなくなり、困った時は他の子ども達が、助けていることも、うっかりすると、気づかずにはいた。

学校のテストが終ってから、お母さんが、

「気が弱いものだから、先生に何にも言えなかったらしいです。左利きを気にして、鉛筆にもぎらなかつたようで、再検査を受けたのですよ」と涙を流しながら話された。

何と世の中は薄情にできているのだろうと私も泣きたくなつた。

次の日からまた、K男の個人指導を始めた。絵本の附録にあったのりものの製作をさせた。子ども達が登園する度に、K男の側を離れる。側に帰ってみると、クレヨンをじっと持ったままである。見かねた子ども達が「ぬってやろうか」と取り上げかけるので「今日は、K男ちゃんはひとりのできるから」と止めさせた。五種平方の紙を三日かかってぬりあげた。

「Kちゃんぬり方が上手になったネ、先生も作ろうかしら」と隣で左手にクレヨンを持つ。「Kちゃん、今度はスピード出してぬってみようか」と速くぬる競争をする。

「Kちゃんは、そっち（左）の手の方が、よくできるのね、先生もそうよ」と言つて、左手に鋏をもって紙を切つた。側で見ていた子ども達が「先生、左利きやね」と言う。五日かかって、やっと完成した。切ることも糊をつけることも全部、ひとりでした。

その次には、ちょっと形をかえたのりものの紙を与えた。今

度はぬり方もすらすらでき、二日間で完成した。初めて見た製作品であつたので、他の子ども達は「ウワー、Kちゃん トラック作つたね、上手ね、かしてね、僕も作ろう」と代る代る借りて、作り方を見ていた。K男は、自分の作品が、これほどすばらしく評価されると思つてもいなくなつたことだろう。うんうんうんと何度もうなずいては、にこにこしていた。私も嬉しかった。「それでこの頃、うるさいように朝早くから幼稚園に行く、行くと言うんですネ」とお母さんも喜んでおられた。

K男の場合と違ってS男の場合は、その行動を集団の中に訴えてみた。

非常に乱暴で、他人を叩くことは平気である。買物の途中、よく親子で叩き合っている場面を見る。靴下のまま外に飛び出したり、食事の準備をしている時、隣の子のパンをつまんで食べたり、飲みかけたお茶を友だちのコップにそそいだりすることとは、平気である。

K男の場合は、個人の評価の積み上げであるので、その成長の変化は、著しくよく解つたが、S男の場合は、人間として当然そなえねばならないモラルが不備のために、他人との交わりが巧くいっていないので、その判断ができるように導びかなければならず、むずかしかった。

友だちに砂を投げた。

私「Sちゃん、Yちゃんが眼が痛いと言っているよ。眼がつぶれたらたいへんね」

S「それでも(それでも)Yちゃんが僕に投げようとしたもの」
私「じゃYちゃんがあなたに砂を投げってきたのね」

S「いいや、投げんやっただけだね、向うが先に投げようとしたんよ」

S男の主張はいつもこうであった。相手がまず先に、向かってしようとしたので、僕もした、だから先にやろうと考えた相手が悪くて、自分の方は、その被害者である。

親子においても同じであった。お母さんが僕を叩いたので叩きかえしたらまた叩いたので叩きかえしたとはつきり言う。その前後の判断は、全く考えられていない。私はついに「それでは、先生があなたを叩いたら、やっぱりあなたは、先生を叩くの」と聞いてみた。「うん」とうなずく。

「じゃあなたが悪いことをした時、先生が叩いたら」「僕、悪いことしてないけ」

ある時、あまりひどく一人の子どもをいじめるので

私「Hちゃんは、あなたに何もしてないでしょう。どうして叩くの」

S「そいけど(それだけでも)もう前の時、僕を叩いていじめたけ(から)」

私「でも今は、何にもしなかった人を叩くことはいけないと思うわ、Hちゃんは、あなたより小さくて弱いことから、もし今度叩きたくなったら先生を叩きなさい」

私はここでS男に叩かない、ということばを期待したのであったが、そうしようと意志表示をしたので驚いてしまった。

私「でも先生だって、あなたからひどく叩かれたら泣くかもわからないよ」と言うと、ニヤッと笑って、こう奮した顔もほころびた。

イギリスの教育には、鞭が用いられることを聞いた。

子どもがある間違った行為をした時、教師はその行為を子ども自身に認めさせ、その行為に対して明日、鞭をあてるからと承知をさせ、その親にも、子どもの間違った行為のつぐないとして鞭をあてるがよいかと許可をとるそうである。行為の行なわれた直後に鞭を使わないのは、教師も子どもも冷静な立場にかえて反省をする機会をもつためであるようだ。

私達も子ども達を評価する場合、イギリスの鞭のように冷静な立場に立って行なわなければならないと思う。

個人の行動に対する評価は辛辣であっても、その個人全体を傷つけてしまうような評価はさげなければならない。

子どもを評価することは、むずかしいことだと思った。

(八幡市立大蔵幼稚園)